神戸だより

台湾交流支援の会　2018.12発行　Vol.14

＜神戸とジャズ　＞　　高橋　幹夫

ジャズが神戸でどのように発展してきたのか簡単にその歴史をたどってみます。

150年前の1868年明治維新により日本は江戸幕府の時代から近代化への時代へと大きく変わり神戸港もこの時に開港しました。開港と同時に様々な文化が入って来ました。1923年井田一郎氏が「ラフィング・スターズ」という4人のプロバンドを結成し、神戸のホテルでジャズ演奏をしました。このバンドが日本で初のジャズバンド誕生と言われています。1932年には神戸市内にジャズ喫茶が開業しました。

太平洋戦争終戦でアメリカ軍が日本に駐留し英語放送がはじまり、巷にジャズが流れるようになります。

1953年には神戸三宮にジャズ喫茶「JAVA」が開業。今でも営業しており、現在最古のジャズ喫茶といわれています。現在神戸市内に20軒近くのジャズライブハウスがありますが、その中でも1969年に神戸三宮の北野坂に誕生した「ジャズライブ＆レストラン　ソネ」は多くのジャズファン、観光客が訪れます。パスタ、ステーキなどを楽しみながらジャズ演奏を聴くのは格別です。

＜ライブハウス　ソネ＞

また神戸では様々なジャズイベントが開催されます。

1982年から始まった「神戸ジャズストリート」は今年で第37回を迎え、10月6,7日の2日間、神戸・三宮の北野坂近辺の9か所の会場で約200人の海外・国内のアーティストがそれぞれ素晴らしい演奏を披露しました。　1993年からは中学校20校、高等学校30校参加する「ジャパンスチューデントジャズフェスティバル」が神戸にて開催されるようになり、2015年からは4月4日を「KOBE JAZZ DAY」と制定しこの日に近い日曜日には市内各所でコンサートや屋外ライブがあり、屋台なども出て市内がジャズ一色に染まります。

私はジャズに興味はあるのですが、スタンダードな曲を家で聞く程度でなかなか入り込みにくいと感じています。　しかし一度前述の店のソネに行って感動しました。店と演奏者、客が一体となった何とも言えない雰囲気に包まれ非常に良い体験をしました。

この様なライブハウスが20か所もあるので私も時々色々な店を訪ねてみたいと思います。

＜播州荒川神社の秋祭り＞　小高　功

明治時代まで姫路を中心に東は現在の神戸市西部から西は赤穂市にまで広がった播磨国(はりまのくに、通称；播州)がありました。中心部の播州平野では水田の稲が実り、また周辺の丘陵地では様々な果樹や野菜他の農産物が豊富に採れ、豊かな農村社会が形成されています。各村は、地域を守る神様(鎮守神)を祀り、秋にはその神様に豊穣を感謝する祭りが行われました。

有名な「灘のけんか祭り」他播州の秋祭りとして、40余の祭りが今でも10月を中心に行われています。

先日、そのうちの一つ・姫路の西部にある荒川神社の祭りを見に行きました。この神社の氏子(うじこ)である村々から屋台(太鼓台とも呼ばれる)が出発し、9時過ぎには神社の練り場に集合します。荒川神社と染め抜かれた多数の青い幟に屋台ごとの名前を縫い込んだ幟が加わり、神社のある山全体は祭りの気分一色です。その担ぎ手のいでたちにはびっくり致しました。

全員が回し姿（相撲の回し姿そのものです）に村々毎に思い思いの法被を羽織っています。数トンはありそうな屋台を数十人で担ぎ、一台ずつ、またある時には3，4台が一緒に練り回り、その勢いを競い合っています。

普段、土ぼこりなど見ることがなくなりましたが、この時の土ぼこりの立ち上がる様子は担ぎ手の顔が見えなくなるほどです。

その後屋台は山の中腹にある神社に登ります。屋台の重さでいまにも崩れそうな体勢を立て直そうと、悲壮なまでの掛け声には今迄に経験したことがないすさまじさを感じました。 夕方5時過ぎまで練りの行事が続き、その後順次それぞれの村に帰っていきます。

そうそう屋台には子供用と大人用の2タイプあります。トレパン姿の女の子も大人に守られながらたくさん参加しています。

少子高齢化が進み、繁華街以外での若者の姿はめっきり少なくなりましたが、屋台を担ぐ若者に若い家族も加わって、その数の多さに驚きました。また長老たちの陣頭指揮もあり、大切な村の上下関係が、また若者同士の絆がしっかりと出来上がっているようです。